「船橋大神宮灯明台」

千葉県船橋市

延喜式内社である、意富比神社（船橋大神宮）の境内に今も昔の姿を伝える灯明台は、標高 27 mの丘の上にあり、正式名は「浅間山（せんげんやま）灯明台」であった。東京湾を西南に見る海岸洪積台地上にあるため、付近の海上から絶好の航路目標であり、灯明台設置以前はかがり火を焚いたとも伝えられている。

慶応4年（1868）戊辰戦争の際、本社と共に常夜灯が焼失し、再建されたときに現在の形になった。灯明台以外の全ての建物は、旧来の日本式建築様式を踏襲して再建されている。灯明台だけが和洋折衷の建築になったのは、西洋式灯台が旧来の日本のものとは比べものにならない光の到達距離をもっていたこと、明治政府が灯台を西洋式へ規格統一を図るべく行政指導していたこと、などが直接・間接の要因と考えられる。

光源は石油ランプ３基で、錫製の反射鏡も３基設置され、その光は海上約６マイル（9.7l km）に達したと言われる。レンズは付けられていないが、当時の最新式であった。

灯明台

１階、２階の和室は点火や見回りをする管理人の宿舎として使われていた。灯台は、当時の袖ヶ浦漁民の生活をずっと支えていた。現在も、海上のある定点とこの灯台とを結ぶ直線は、漁区の境界線として定められているという。

船橋浦の大規模な埋立のため海岸線が遠ざかり、漁港整備の充実に従い灯台としての必要性も薄れ、その後は大神宮の書庫などに使われていたが、現在は千葉県民俗資料の指定をうけ保護されている。

みどころ

- **灯明台の他、船橋大神宮境内には漁業に関わる船玉神社、八剣神社の御輿、六人網主の碑等が祀られている。また近くには、漁師町と関係の深い供養塔、大仏様（不動院）がある。**